

Viator

VOL.26



親愛なる兄弟姉妹の皆さん、御復活おめでとうございます

主はまことに復活されました。このような信仰の深遠なる真理をお祝いするときにも、私たちはコロナウイルスの世界的拡大という陰鬱な日々を過ごしています。評議会メンバーならびに修道会メンバーを代表して、復活祭のお祝いと、喜びと希望に満ちあふれた復活節の新たなお祝いのことばを皆さんに申し上げたいと思います。

覚えている限りでも、今回のように聖週間を過

主任司祭・ウィリアム神父
ごしたことは一度もありません。重大なパンデミックが発生し、多くの人々が亡くなり、人との距離をとったり、ほぼすべての人が家に引きこもり、失業や不安が語られています。およそ2ヶ月前から人々が口にするこぼは次のようなものばかりです。家への引きこもり、社会で人と距離をとること、人と離れて暮らすこと、そして、これらに関連して、手洗い、公衆衛生、マスクの着用な

どが人々の話題となるばかりです。本当にいまやパニックの状況が生まれつつあり、それは個人だけではなく、人々の振る舞いにも著しい影響を与え、さらには私たちのものの考え方や信念をも改めて問い直すもので、その勢いで私たちは暮らしの指標や価値観、社会組織や統治制度などをも疑問視しかねません。世界中の公衆衛生がこのように著しい危機に陥ったため、私たちはおたがいの距離をとるだけでは十分ではないのです。距離とは自分に対しても向けられます。というのも、これからは一人一人が手で口や鼻、目を触るときには感染しないように気をつけなければならないからです。

しかしこれと同時に、多くの人々が表している勇気や連帯感、身近な人への思いやりや創造性あふれる行いなどを見るにつけ、喜ばしく思います。

私たちヴィアートル会会員はどうでしょうか。私たちの信仰は浄められ、強められると思います。というのも、聖土曜日の朝の祈りで歌う賛歌が告げるように、「御血の流された日から、すべてが恵みであることを、あなたがたはよくわかっているからです」。

今年の復活節の祭日を見ると、ヘブライ人が死のものともせず苦難から逃れようとしていたエジプトでの祭りの日々を思いおこさせます。また、死刑に処せられながらも3日目に復活したイエスを思いおこさせます。ですから、この復活節にあたっては、私たちの苦しみをイエス・キリストに捧げましょう。キリストは私たちの罪を自ら負い、私たちに命を豊かに与えられたのです。

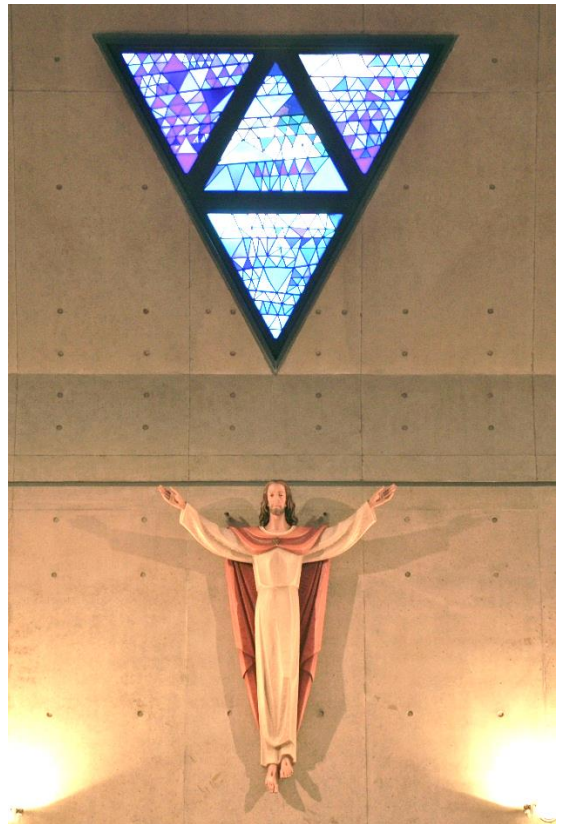
親愛なる信徒の皆さん、イエスはその死と復活によってこの世に永遠の命をもたらしました。そのために、このように深刻な時にあっても、皆さんは人と会うことなく暮らし、また家に引きこもるといった体験をすることができるのです。北白川修道院でも、私は4名の兄弟（ボアベール神父

とロナルド神父、ブラザー・ベルナル、ブラザー・マテュー）とともにミサを捧げて修道院にこもっています。

主にあつて喜びなさい。主はまことに復活されたのです。イエスは死が近づいたとき「今や人の子は栄光を受ける」（ヨハネ 12、23）と言われました。これは逆説的なことかもしれません。しかし、命は死より生まれたのです。というのも、一粒の麦が地に落ちて死ななければ、ひとつのままですが、死ねば多くの実を結ぶからです（ヨハネ 12、23）。そこで苦しみがキリストの苦しみにあずかっているのであれば、そこにはあがないの意義があることを私たちは知っています。

十字架につけられ復活されたキリストが私たちに与えてくださる命と平和を受けいれようではありませんか。

皆さん、御復活おめでとうございます。



北白川教会への私の夢と希望

ゲェタン・ラパデイ神父

今日のミサの準備をするために三つの朗読を読みました。神様は私に何を伝えたいのかと考えると、次のことが頭に浮かんできました。イザヤは、バビロニアから戻ってからのユダヤ人たちが不幸に見えたので、彼らに次のように言いました。「あなたたちは奴隷としてバビロニアへ連れていかれた時、自分の不幸の原因は先祖の教えから離れたからではないかと反省したではないですか。先祖のおかげで、またその教えに従って模範的な生活をし、バビロニア人のために世の光となること——『飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと』——をしたからこそ幸せになったことを忘れたのですか。バビロニア人と王様があなたたちの素晴らしい行いを見て、感激し、あなたたちのようになろうとしたことを忘れたのですか。そのおかげで王様はエルサレムに戻るだけでなく神殿を建て直すことまでも手伝うと約束されたことも忘れたのですか。なぜ戻ってから、兄弟であるサマリア人を異邦人のように扱って受け入れないのですか。世の光となるように生活してください」。

イエス様は私たちに「世の光である」とおっしゃいました。「世の光になりなさい」とはおっしゃっていません。私たちはキリスト教の信者になった時素晴らしい宝物をいただいたことを思いだしましょう。その宝物とは神様のみことばです。それは自分のためだけのものではありません。全世界の兄弟と姉妹に分け与える、つまり分かち合うためのものです。パウロは伝え方があまりうまくなくてもイエス・キリストが私たちのために自分の命を捧げたということをあちこちで伝えま

した。それを聞いた人はイエスの弟子となりました。私たちもパウロのように熱心にお互いを愛することができれば世界は必ず変わって住みやすくなるはずです。

北白川教会に対して私の夢と希望があります。ごミサが終わってから皆さんは互いに話をしますが、自分の共同体の中で困っている人がいるなら、その人のために何ができるかを考えて実行すれば、それを見て大勢の人が私たちの共同体のメンバーになりたいと感じるでしょう。

皆さん、北白川教会のメンバー一人一人が世の光となりましょう。

(2020年2月9日の説教より)





ありがたいこと

マリア M. K.

無宗教の両親の元で育ったので、浄土真宗の高校に入学するまで宗教とは無縁だった。

高校では週に1時間宗教の授業が課せられており、1年では世界の宗教全般を、2年では仏教を、3年では浄土真宗を学ぶというカリキュラムだった。

とはいえ私はそれを歴史や倫理の授業のおまけくらいにしかとらえていなかった。

それが「宗教」というそれまで経験したことのない未知のものだと認識したのは、3年で親鸞の「悪人正機説」を習ったときだ。

『歎異抄』第3章、「善人なおもて往生を遂ぐ。いわんや悪人をや」。

善人でさえ往生するのだから、悪人が往生しないわけがない（必ずする）。

え、逆でしょう、とものすごい違和感を覚えた。

自分の力で一大事を解決しようとしている間は他力（阿弥陀仏の本願）をたのむことができないので、阿弥陀仏様のお約束の対象にはならない。しかし自力をすてて他力に帰すれば真実の浄土へ行くことができる、というのだ。

南無阿弥陀仏と唱えるだけで往生できるなんて簡単すぎるにも程がある。

滝に打たれるとか、不眠不休で山中を歩くとか、そういう修行の果てに往生があるのではないのか、とステレオタイプな偏見を持っていた。

それから十数年後、受洗準備のため公教要理を勉強していたとき、再び悪人正機説に出会った。

「赦しの秘蹟」だ。自分の罪を認めて悔い改めればどんな罪でも赦される。

まさに「自力をすてて他力に帰する」ではないか。

あのとき感じた未知の理解しがたい石のような違和感が、時を経て、そしてキリスト教の学びを通して真珠に変わったような気がした。

煩惱でできている私達は、どうやっても迷いを離れることができない。それを可哀想に思われて阿弥陀仏が本願をおこされた。

そのねらいは悪人成仏のためなのである。

聖書でもイエス様は実によく私達をあわれんで、つまり可哀想に思ってください。イエス様は十字架上の死によって私たちの罪をあがなってくださいなのだ。

それまで私は自分のことを悪人とも罪人とも思っていなかったが、その傲慢さこそが悪であり罪であるとわかった。みことばによってうぬぼれをはぎ取られ、醜い自己がさらけ出された気がした。

自分を正しい人間だとうぬぼれて他人を見下しているファリサイ派の人ではなく、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら「神様、罪人の私をあわれんでください」と願う徴税人になりたいと、それ以来ずっと思っているが、ふと気づけばいつの間にか、またうぬぼれが私にまわりついているのだ。

でもだいじょうぶ。赦しの秘蹟のおかげでその罪は赦してもらえる。なんとありがたいことだろうか。そしてまたふと気づけば…。

この果てのないくり返しが、せめて螺旋階段のようにイエス様のおられる天に向かって登ってゆくものでありますように。

編集後記（広報部メンバーより）

5月12日は、ナイチンゲールの誕生日である。この日は後に、彼女の看護への貢献を讃えて国際看護の日に制定された。ナイチンゲールと言えば、エレガントな看護師像を描く人が多いかもしれないが、実際は強力な指導力を持ち、統計学に長け、データに基づいて公衆衛生や政治の領域に科学的に意見する人でもあった。クリミア戦争従軍では、英軍の兵士の主な死因が感染症に因ると推論し、手洗いや衛生的な環境の提供という基礎的な感染症対策によって、死亡率を激減させ、そのデータを統計グラフに表した。統計グラフは書籍にもなっており、とてもユニークで、現代の統計学者にも価値を認められているらしい。原本は大英図書館に蔵され、今でも閲覧可能である。

日本は今、新型コロナウイルス感染症のために全国に緊急事態宣言が発令され、市民にも感染症予防教育が盛んである。感染予防技術は、看護教育においても基礎の一つで、ナイチンゲールが執った手洗い、衛生的な環境・個人の免疫力を高める栄養や睡眠・寛ぎの提供は、今でも感染症を予防するための最も基本的な防御策だ。勿論、それは治療ではないから、感染症を治すことにはならないし、基礎は大抵目立たないから、軽視されやすい。しかし、その基礎があって治療も生きてくる。

日々の生活はどうだろうか。聖週間の典礼にも与れないまま、復活節に入ったが、何か実感がない。集団感染は防がねばならず、特に高齢者の感染による重症化を避けるために、教会は閉鎖されたことはわかる。しかし、初期の頃より、この新しいウイルスについて知識も対処法もわかってきて、医学や科学的な知識に基づいた感染症予防対策をとりつつ開けることができるのではないか。聖堂の静けさ、共同体の祈り、小さな分かち合いは、キリスト者として生きる土台だ。個人で

は、大事な半分が欠けてしまう。この不安なときに、教会に集えないもどかしさを感じながら、今年も、自粛の復活節である。

（バプテスマのヨハネ H. A.）

+++++
PCR装置は単なる温度を上げ下げするだけの機械である。機械がなくても試薬さえあれば、家でもできる。また、日本ではもっと簡単な技術もあり、1時間以内に高感度で目視で判定することが可能である。教育現場では、コロナ問題で慌てて遠隔講義システムを導入した。遠隔会議のシステムはすでに世界中で発達していたにも拘らずである。構築された技術と現実とのギャップは著しい。電車に乗って職場に行ってしまう自分も怖い。在宅勤務の方がむしろ効率的な場合もあるが、通勤本能にはなかなか勝てない。理想的な行動と現実とのギャップも激しい。

問題に対しては理想的な解決方法があろうが、現実はそのを選ばない。近道をしようが、遠回りをしようが、どう生きるか、ということを考える大事な時間になりたいと思う。今回の神父様のメッセージや寄稿をゆっくりと味わえたことに感謝したい。（アッシジのフランシスコ M. H.）

+++++
例年春には学会のためドイツに行っていますが、今年は見ると見るうちにドイツにもコロナが広がって学会自体が中止となり、渡航を断念しました。呆然としているうちに日本でも感染者数が増え、緊急事態宣言下ミサに与れない復活祭となりました。

公開ミサが中止となってから、ケルンのミサのネット中継を見えています。聖金曜日の受難曲、聖歌の豊かさや歌い方、朗読の仕方、少人数での捧げ方、撮影のカメラワークなど、いろいろなことに感心していますが、聖体拝領はできません。復活祭前にローマ在住の霧島神父様にメールで安

否を伺った時、信徒が典礼に与れず聖体拝領できないことを気かけ、祈りと犠牲を捧げますというお返事でした。ケルンでは公開ミサ中止でも復活祭前に告解と聖体拝領の機会が設けられたようで、久しぶりの拝領に信者は感動していたそうです。早くコロナが収まり教会でのミサが再開しますように。 (マリア・ヨハンナ M.M.)

+++++

ある司祭がクララ会で祝われた誓願式のミサに招かれ、その後の祝い会に出席した時のことである。クララ会はフランシスコ会に連なる観想修道会で、シスターは禁域と呼ばれる修道院の内部にこもり、外部に出るのは病院と選挙の時に限られている。クララ会の敷地は、ベネディクト会といった古くからの観想修道会が所持するような広大な敷地を持たない。域内の散策にも限りがある。

祝い会は修道院の庭で行われたそうだが、主役のシスターはそこに姿を見せなかった。喜びを分かちあいたくないためではない。禁域のなかでその喜びを姉妹とともにしたかったのだろう。誓願を立てたシスターは面会室で格子を隔てて列席者と喜びを分かちあったそうだ。その時にある神父がつぶやいた。「中に閉じ込められているのは僕らじゃないのかな」。格子を隔ててシスターと私たちの世界は逆転しているのではないか、この神父は禁域を我が身に引きうけたのである。

私たちは禁域に暮らすことなく、自由な世界に生きている。そのために、コロナ禍は私たちを家庭などの狭い空間に閉じ込め、私たちから自由を奪っていると私たちは不満をつのらせている。確かに職場や学校、さらには教会までも閉ざされ、私たちは不自由な暮らしを余儀なくされているのかもしれない。だが、閉ざされた暮らしを日常とする人々から見ると、むしろコロナ禍を堪え忍ぶような暮らしこそが日々の暮らしに他ならな

い。このような閉ざされた暮らしを思い描くと、私たちがこれまで自由だと思っていた暮らしは実のところ非日常の暮らしになるのではないか。

自由とは何ら制約のない状態に存在するものではない。むしろ自由とは制約を自覚しながらも、ある目的に向けて開かれるものである。禁域に暮らすシスターは自ら制約を受け入れることを通じてより大なる自由に開かれようとしているのではないか。コロナという災いは私たちに自由のありかを考え直すことをうながしているのかもしれない。 (ヨハネ N.N.)

+++++

このコロナがもたらした状況——特に3月半ば辺りからの世の中の動きを振り返ると、月並みな言い方ですが「前代未聞の未曾有の出来事」という言葉しか思いつきません。3月初めにはまだ楽観的なムードが濃厚だったのに、大相撲、甲子園が中止になった辺りから、にわかには空気が重いものになり、自粛要請を受け、だんだんと休業する店が増えていき、出歩く人影は減り、普段は学生を始めとして多くの人で賑わう百万遍周辺は、夜7時を過ぎた辺りから、なかばゴーストタウンと化しています。

そして、自粛要請に応じない飲食店や、公園で遊ぶ子供達、コロナの対応に遅れた政権への批判に対する心無い攻撃の数々を目の当たりにすると本当に心が痛みます。

こういう非常事態に、個々人の人となりが露呈するというのでしょうか。そういうことを含めて、決して大げさな話ではなく、今回のコロナによって、人類全体が試されているという気がしてなりません。

日本人としての民度、人としての矜持、そしてキリスト者としては…なんでしょう？そこは各人の宿題にするということにして、いかに今後の世間の流れに対峙していくかということは、決して

ゆるがすことができない大きな問題かと思えます。外で行き交うノイズに惑わされることなく、祈りと内省と熟慮によって、皆がそれぞれより良い道を見出すことができるよう願ってやみません。
(アウグスティヌス H.S.)

+++++

この3月にカナダに帰国されたラバディ神父様は、ヴィアートル修道会の聖職者の中でも、特に教育界に多くの功績を残された方でした。1988年から16年間洛星中学・高校の校長を務められ、その後も16年間学校法人ヴィアートル学園理事長を務められました。生徒・卒業生の人気も高く、私の周りでも多くの元クラスメートたちが別れを惜しんでいました。

元クラスメートの一人が思い出してくれた神父様のエピソードがあります。英語の授業のときに神父様から聞いた、こんな話でした。

神父様が小さかった頃。近所の子供たちに英語を話せないことを馬鹿にされ、英語で言い返せずにフランス語で悪口雑言を言い返したのを聞きつけたお母様。「フランス語では通じないよ。」「じゃあ英語でどうやって言い返したらいいの?」「ではちょうどいい言葉を教えてあげましょう。」その言葉を聞いたラバディ少年、さっそくその子供たちのところに行って、できるだけその利いた声で教えてもらった言葉を言いました。ところが、彼らはきょとんとした顔を見合わせるばかり。——実はその魔法の言葉は「I LOVE YOU」でした。

私も、中学1年に初めてお会いして以来、時に厳しく、時に優しく、決してぶれることのない神父様を慕い続けてきました。今回のご帰国で淋しくはなりますが、新たな使命を十分に果たされますよう、お祈りいたします。

(ペトロ＝ラファエル T.Y.)



カトリック聖ヴィアートル北白川教会 2020年5月12日発行
ホームページ : <https://www.stviator-kcc.org/>